



第2回よろくて市 実行委員（最前列）とボランティア

子どもの笑顔に全集中！

「第2回よろくて市」を開催して

はじめに

「高校生が地域のイベントを主催する。」初めはそんなことができるのかと半信半疑だった。しかし、一つ上の先輩方が「コロナ禍で客足の減った商店街を元気にしたい」という思いから開催した昨年8月の「よろくて市」にボランティアとして参加して、来場した多くの楽しそうな方々や、威勢のいい声で呼びかける飲食店の方々の姿を見て感じたことは、商店街に活気が戻ることと多くの人が待っていたのだということだった。そして、その働きかけをするのが高校生でも何ら問題はないのだということが強く心に刻まれ、少し勇気を持って気がした。

「第2回よろくて市」を自分たちでもやってみたい。できるかできないかを考えていては何も始まらない。「やってみよう」が全ての源だ。コロナ禍でどこまで実現できるか分からないが、とにかくやってみようと考えた。そして同じクラスから12名が実行委員としてこの企画に中心となって参加してくれた。

新たなターゲット

まずは、前回も協力をしてくださったという地域おこし協力隊の方に相談し、おおまかな流れを教えてもらうことから始めた。そこで、まず問われた一言が「何のためにやるのか」だった。「やりたいからやろう」という自己本位では周りの人は協力してくれない。前回開催した

先輩方の思いを無駄にしまっただけではないのだと気づかされた。

昨夏に開催された「よろくて市」はテイクアウトの店を中心として、旭町通り商店街で行われた。先輩方のおかげで前回出店した飲食店との連絡も取りやすいだろうと考え、私たちが開催する「第2回よろくて市」は、「コロナウィルスの影響で町内行事が中止となり、寂しい思いをしている子どもたちに笑顔になれる日を作りたい」というテーマで計画することにした。そこで、旭町通りのテイクアウト屋台に加え、役場駐車場を利用したステージショーなどの企画やフリーマーケットなどを企画した。また、前回は来場者へのアンケートの回収が少なかったということもあり、会場内を巡ってもらったためのスタンプラリーも実施し、抽選場でのアンケート回収することにした。

感謝を感じた準備期間

二学期期末考査を挟みながら、必要な道具を準備したり、出店してもらう飲食店への依頼をしたり、また、ステージに参加してくれる団体との交渉を行ったりした。子ども向け企画では、缶馬・ベニーちゃん福笑い・スパーボールすくいといった遊びを準備していたが、思いがけず、趣味でサバイバルゲームをされている方が射的に使える道具を提供してくださることになり、子どもたちにもきつと大人気になるだろうと感じた。また、フリーマーケットに出す品物

の提供を学校内の生徒に呼びかけたところ、衣類やおもちゃなど非常にたくさん品物が集まった。今回は役場駐車場での子ども向け企画をメインに考えていたので、テイクアウト屋台についての企画は中種子町商工会に協力を得ながら進めることにした。商工会からはスタンプリリーの景品やガラポンの道具などを快く提供していただき、大変ありがたかった。



レクリエーション



商工会での打ち合わせ

さらにイベント直前になり、心強い助っ人が参加してくれた。前回の「よろこび市」企画の中心だった先輩2名が、受験を終えて手伝ってくれることになったのだ。自分たちだけでは気づかなかった計画の粗さを的確に指摘し、放課後遅くまで残って一緒に準備をしてくれた。先輩の献身的な姿を見るごとに、「地域の人のために」「子どもたちを笑顔にするために」という思いの大切さが改めて深まっていったように感じる。

「第2回よろこび市」当日

12月6日(日)、「第2回よろこび市」は開催された。当日は小雨の降る中、45名の高校生ボランティアが参加した。事前の打ち合わせ不足のためか、テント設置に手間取り、予定より開場時間が大幅に遅れてしまい、出店する飲食店には大変迷惑をかけてしまった。

コロナ対策を第一として、入場口には手指消毒エリアを設け、さらにマスク着用を呼びかけ、子ども向け



スーパーボールすくい



ハンガーリサイクル

企画でも遊具の消毒を徹底して行うことにした。事前の広報活動が少なかったものの、小雨でも大勢の方がマスク着用とエコバック持参で来場してくださった。ステージでは、雨のために出演できなかった団体もあったが、大人から子どもまでたくさんの方が楽しんでくれ、射的をはじめとする子ども向け企画も大盛況であった。また、旭町商店街のテイクアウト屋台でも、終了時刻の14時前には、すでにほとんどの店で完売となるほどの売れ行きだった。スタンプリリー企画では、中種子町のマスクット、ベニーちゃんに会ってスタンプをもらうようにしていたが、ベニーちゃんの登場に子どもたちも驚いたようで、行く先々でたくさんの人だかりができてしまい、あまり長くはいられなかった。

が、それでも、自分たちが考えて行動したことが、多くの人の、とりわけ子どもたちの笑顔につながっているのだと感じられたことは、かけがえのない経験になったと思えた。

おわりに

「第2回よろこび市」は先輩たちの姿を見て、「自分たちもやってみよう」という気持ちがあふき出た。しかし、多くの人を動かすには、「何のために」という思いを共感してもらわなくては成し遂げられないのだということや、その純粋な思いがあれば自分が思う以上に協力してくれる人がたくさんいるのだということを感じ得た。また、このような大きな企画を行うには、私たちはまだまだ未熟であり、たくさんの方の協力がなくては決して開催にまでこぎつけることはできなかっただろう。だが、未熟なりに今回の経験を通過して、物事の前後・表裏に目を向けるということを知ることができた。「地域の人のため」「子どもたちのため」と言いながら、結果として非常に多くの学びを得たことを甘受して、この経験をさらに広げていかななくてはいけないと感じている。

今回の企画・運営に際し、協力してくださったすべての方々、そして、私たちに道を開いてくれた先輩方から感謝します。

鹿児島県立種子島中央高等学校
普通科3年 寺田 皓将
加藤 太一